

経済学史 (2019年度前期)

第5講 その1: マルクスと「資本論」

担当者: 佐々木 啓明*

*E-mail: sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp; URL: <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sasaki/>

——1 カール・マルクス——

●マルクス主義

古典派経済学の労働価値説を発展させ、資本主義経済における等価交換を通じての資本による労働の搾取の存在を明らかにする。

●マルクスの生涯と著作

1818年、ドイツのライン州生まれ。ボン大学、ベルリン大学で学び、イェナ大学で学位を得る。

1848年『共産党宣言』, 1859年『経済学批判』, 1867年『資本論』第1巻, 1883年『資本論』第2巻, 第3巻, そして第4巻にあたる『剰余価値学説史』の原稿を遺して没。

——2 資本論の概要——

●商品

資本主義経済における商品が分析の対象とされる。

商品は、それに体化されている投下労働価値の比率で交換される。

商品の価値 = 不変資本 + 可変資本 + 剰余価値

不変資本：生産手段の購入に充てられる資本

可変資本：労働力の購入に充てられる資本

剰余価値：資本家が受け取る利益

●剰余価値

剰余価値は、労働力がその価値以上の労働をするから(剰余労働の搾取)。

剰余価値率(搾取率) = 剰余価値 / 可変資本

- 資本の有機的構成 (organic composition of capital)

不変資本/可変資本のことを資本の有機的構成と呼ぶ。

- 再生産表式

社会が持続するためには、再生産が必要不可欠。マルクスの再生産表式は、資本主義のもとで再生産を満たすための条件を示したものである。

→ 単純再生産と拡大再生産

- 利潤率低下法則

マルクスのタームでは、利潤率は

$$r = \frac{M}{C + V}$$

剰余価値率が一定の場合、資本の有機的構成が高まると利潤率は低下。